

山中に残るもつこの町並み

仙の山の遺跡が語り始めた

江戸時代に記された文書によると、石見銀山には最盛期に二〇万人の人がいたと記されています。町並みの残る谷筋を歩いただけでは、これだけの人がいたとはとても思えません。しかし、大げさな誇張と一笑に付してしまつのは早計かもしれません。

大森の町並みの南、銀山地区の東に標高五三七メートルの仙の山がそびえています。銀を産出するこの山の谷



仙の山 矢印が発掘された石銀地区。右上に大森の町が見える。

には、人が住んだ跡である平坦な段が連なっています。なんと頂上近くの石銀地区と呼ばれるあたりまで平坦面があるのです。その数や実態はまだ明らかではありませんが、数多くの人が働いていた当時の様子をほつぷつとさせます。

近年この石銀地区で発掘調査が行われ、深い山中での探掘や精錬作業の一端を垣間みることができました。



石銀地区の発掘調査
石垣で支えられた平坦面の上に溜枘や炉が出た。奥に間歩が見える。

石銀地区の発掘調査

一九九四年、仙の山頂上近くで発掘調査が行われ、この山一帯に広がる平坦な段の様子が明らかになりました。石垣で区切られた平坦面には、石で囲んだ溜枘（水をためて、砕いた石を入れ、重さの違いで鉱石を選び出す比重選鉱）をしていたと考えられる。や精錬の跡などが出てきました。すぐ近くには鉱石を掘り出した間歩もありません。とつやこの山上で、鉱石の掘り出しただけではなく、銀の精錬に至るかなりの工程をこなしていたらしいのです。



すぐ近くを開く間歩



石で囲まれた溜枘



谷から山頂にかけて連なる建物の跡。
今は深い山だが、当時は鉱石を砕く槌音や職人達の声が響いてにぎやかだったに違いない。

江戸時代の面影を今に残す大森町

大田市大森町の過疎化が進む中、石見銀山に誇りをもち住民たちが銀山を生かした町づくりを立ち上げました。一九五七年に大森文化財保存会が発足し、遺跡の清掃や文化財愛護に努め、一九六九年には鉱山跡としては全国で初めて探掘の跡の間歩や信仰の対象の寺社などが国指定史跡になりました。

また大森の町並みは、江戸時代の風情を現在に伝えています。その町並みは一九八六年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。桜橋から新切間歩に至る二・五キロの家並みのあちこちに、当時の面影を残した屋敷が多く残っています。

大森の町並みの特徴は、武家の屋敷と町人の屋敷が混在していたことにあります。同じ通りに武家と町人が一緒に住んでいたのです。寺が多かったことも特徴で、当時のことを記した『石見銀山旧記』には、「銀山百力寺」と寺の多さを物語る記述もあります。

昔の姿をよみがえらせる技術

大森町の古い町並みを保存し、再生させるために、家並みの保存修理を行っています。このとき柱や梁など材料の取り替えは、最小限にとどめ、同時に技法についても当時のやり方を再現できるよう、綿密な観察をしたうえで工事にとりかかります。こうして、銀山の町として繁栄していた当時の姿がよみがえってきました。



古い材料や技法を生かした改築



銀山を支えた町